

## 至適名称を求めてーDOHaD-研究の推進にー

メタデータ	言語: jpn 出版者: 日本DOHaD研究会 公開日: 2016-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福岡, 秀興 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10271/2946">http://hdl.handle.net/10271/2946</a>

## 至適名称を求めて—DOHaD—研究の推進に—

福岡 秀興

早稲田大学理工学術院

DOHaD説 (Developmental Origins of Health and Disease) とは、受精時、胎芽期、胎児期、乳幼児期をDevelopmental Stageとして位置づけ (人生初期の1000日間)、この時期の環境と遺伝子との相互作用で健康・疾病の大きな素因が形成されるという概念で、日本DOHaD研究会では「受精時、胎芽期、胎児期の子宮内及び乳幼児期の望ましくない環境がエピゲノム変化を起し、それが疾病素因となり、出生後の環境との相互作用によって疾病が発症する。生活習慣病等の多因子疾患はこの2段階を経て発症する。」(日本DOHaD研究会ホームページより一部引用)と定義している。当初は仮説に過ぎないとまでされていたが、ヒトでも分子機序が解明されつつあり、現在では確立した学説と考えられている。しかしエピゲノム変化及び Developmental stageというのは、共に今なお人口に膾炙されていない。それだけに名称に加え、概念自体が理解され難いものといえる。しかしこの学問領域は以下述べるごとく極めて重要であり、研究者に加え社会全体で理解していただきたいものである。その重要性を示す背景として、少子高齢化社会における低出生体重児頻度 (地域格差の存在)、生活習慣病を含む成人病、発達障害児等の増加が著しい。世界でもこれら生活習慣病を含めたNCD (Non communicable disease : WHO)、更に疾病と健康の中間としてのグレーゾーンというべき人々が著しく増加しており、その発症機序と予防法の解明は人類にとり最重要課題と言える。この実現こそ、個人と社会の質を大きく変えていくものと予想されている。

経済学領域では、小さく生まれることが社会に大きな経済的影響を与える事が証明されており、詳細で精力的な研究が行われている。また生命科学の領域では、この概念を基盤として異なる多くの名称の元に膨大な研究が遂行されている。その論文数は年を追う毎に指数関数的に増加している。例としてPub Med検索 [2015.06.15 現在] では、fetal programmingで139,660報、Fetal programming cardiovascular:13,160報、Fetal programming diabetes : 5235 報 , Fetal programming nutrition :5093 報 ,Developmental programming :1983報、DOHaD :608報、FOAD :1787報、metabolic memory :2551報、thrifty genotype: 225報があった。この数は大きな研究の流れを示している。

現在本DOHaD研究会の会員構成は、基礎生命科学・農学 (エピジェネティクス、分子栄

養学、獣医科学)、臨床医学(内科、小児科、産婦人科、精神科、看護学)、疫学統計、教育学、栄養学〔栄養教育、栄養教諭、学校給食〕、経済学、社会学、企業、メディア等多方面に渡っており、学際的な研究会といえる。第二のダーウィニズムとして、疾病概念を大きく変えるものであるとも考えられる。環境ホルモン学会(正式名:日本内分泌攪乱化学物質学会)のような他学会の名称検討の歴史も参考にしつつ、衆知を結集してよい名称を求めて検討したい。

#### 略歴】

昭和48年 東京大学医学部医学科卒。 東京大学医学部助手(医学部産婦人科学教室)、香川医科大学助手、講師(母子科学教室)、米国ワシントン大学医学部薬理学教室 **Research Associate**、**Rockefeller**財団生殖生理学特別研究生、東京大学医学部助教授(母子保健学)、東京大学大学院助教授(医学系研究科発達医科学)、早稲田大学胎生期エピジェネティック制御研究所、総合研究機構研究院教授を経て、早稲田大学理工学術院総合研究所研究院教授 現在に至る

- ・米国内分泌学会会員、日本内分泌学功労代議員
- ・日本母性衛生学会監事、日本DOHaD研究会代表幹事
- ・評議員(日本骨粗鬆症財団、日本妊娠糖尿病学会、日本臨床栄養学会他)
- ・認定臨床栄養学術師(日本臨床栄養学会)、産婦人科専門医
- ・第6次第7次「栄養所要量」及び「妊婦のための食生活指針」策定委員等